



新事実の第一は、ワシントンの議会図書館に所蔵されるパート譜完本がロッシェニの旧所蔵と判明し、作品の由来を記した自筆コメント以外にも題名や楽譜部分にロッシェニ自身が加筆訂正していたこと。筆写者が付した題名「Quartetto/i (四重奏曲)」を嫌ったらしく、パート譜の記載をすべて「Sonata/e (ソナタ)」に書き換え、クレシェンドの文字や強弱記号も加筆しています。これは校訂者マッテオ・ジュッジョーリの研究と筆跡鑑定で明らかになり、ワシントンのパート譜が現存資料の中で最も重要な典拠であることも証明されました。

新事実の第二は、ジュッジョーリが昨年8月ペーザロで行った講演で明らかにしたロッシェニによる作曲年の修正もしくは偽造…です。従来文献がこの作品を1804年12歳の作としたのは、パート譜それぞれの表紙に書かれた「12歳のジョアキーノ・ロッシェニ氏により1804年ラヴェンナで作曲 (Composta / Dal Sig.r Gioachino Rossini / in eta' d'anni XII / in Ravenna l'Anno / 1804)」に基づきますが、全集版は年齢を表すXIIが最初に書かれたXVIのVIを削り取ってIIに、作曲年1804も最初に書かれた1808の最後の8を削り取って4に、ロッシェニ自身が書き換えたことと認定したのです。



全集版《六つの四重奏ソナタ》

その結果、ロッシェニの早熟の証とされた《六つの四重奏ソナタ》が12歳の作ではなく、16歳の作と判断されるのです。1808年の作曲ならロッシェニはすでにボローニャの音楽学校に在籍して学友とミサ曲を共作し、カンタータ《オルフェオの死によせるアルモニアの涙》も作曲しています。それだけではありません。ロッシェニはパート譜に記したコメントに、「この六つのひどいソナタは、私がまだ通奏低音のレッスンすら受けていない少年時代に」「3日間で作曲・写譜された」と書いています。12歳ならまだ通奏低音のレッスンを受けていない、と言っても人は信じるでしょう…実際は10歳からマレルビ神父に師事して数字低音を学んでいましたが…。

そう考えると、ロッシェニは自分を神童と思わせるために作曲年と年齢を書き換え、その偽装を補強するためにコメントを付したことになります。であれば、コメントにある「3日間で作曲」も信憑性が失われますね。では、書き換えやコメントだけがこの問題を解く鍵なのでしょうか。そうではありません。ジュッジョーリはパート譜の用紙の透かしが1808～12年のロッシェニのボローニャでの初期作品の筆写譜と同じと認定しています。ですからパート譜の筆写が1808年もしくはその少し後に行われた点も、1808年に16歳で作曲したと推定する根拠になっているのです。

そうした事実の一端が今年の講演で示されたのを知る筆者は、それでもまだ12歳の可能性があるのではないかと淡い期待を抱きましたが、全集版はその希望を打ち砕いてしまいました。今回の全集版で唯一不満なのは、問題のパート譜がいつ頃ロッシェニの所有となり、書き換えや偽装がいつ頃なされたのか推定していないこと。コメントの筆跡は明らかに晩年のパリ時代(1855年以降)のものなのに、ジュッジョーリはこれにふれていません。でもそれが明らかにされないと、偽装の動機が判りません。

これに関して筆者は、ロッシェニがこの筆写譜を入手した時期や場所は不明でも、書き換えと偽装を晩年パリで行ったと考えています。晩年のロッシェニはモーツァルトの存在を強く意識するようになり、自宅の壁にその肖像画を掲げ、自分の作曲したオペラの最高傑作を《ドン・ジョヴァンニ》と言って驚かせ、《魔笛》の自筆楽譜を入手しようとした(その話は当メルマガ第107号に書きました)。そして「彼(モーツァルト)は私の老年の慰め」と語ったロッシェニは、自分もモーツァルトのような早熟の神童だったかと思いたかったのでしょうか。これもまた、ロッシェニの「老いの過ち」の一つだったのかも知れません。

## ▼付記：例会の協力者求む！▼

年6回実施している日本ロッシェニ協会の例会では、お茶の買い出しや終了後の片づけに皆さまの協力をいただいておりますが、リニューアルから3年経たいま、より円滑な例会運営のために機材の運搬やセッティングも含めた協力者のネットワークを作りたいと考えております。スピーカーを含む重い機材は筆者が運搬しますが、プロジェクターなど機材の一部を預かっていただける方、事務局長が不在の際の受付係をしてくれる方など、仕事を分担してくれる会員を求めています。会場は今後も北沢タウンホールを使用しますので、毎回のように出席できる会員でボランティアのネットワークを形成し、例会運営の一端を担っていただきたいのです。

会場でのお茶サービスは、リニューアル前の会場に隣接してカフェやデリバリーの店があつて実施・定着しましたが、北沢タウンホールにはそれが無く、コンビニでペットボトルや缶入り飲料を購入して代用してきました。けれども何人もの会員から、「お茶サービスは不要」「自分で飲みたいのを持ち込めば良い」「会長や事務局長が買い出しに行くのは心苦しい」との意見を頂戴し、今度の例会を最後に取り止めに検討しています。これにより年間3万円の経費が浮く、というのも理由の一つです。

お茶休憩も会員親睦の場ですから、休憩時間はこれまでどおり設けますが、次回の例会(9月26日)であらためて皆さんのご意見をうかがいたしたいと思います。例会運営の協力者として、その場で何人か手を挙げてくれて連絡網が作れると助かります。なにとぞよろしくお願い致します。

本日はこれにて失礼いたします。

新譜《ブルスキーノ氏》の上演映像、ロッシェニ財団の文献の新刊は次号に紹介させていただきます。

(2015年9月15日 水谷彰良)







「ロッシェニ文献の新刊2点」をお届けします。

### ▼9月例会の来場御礼と次回例会(11月3日)のご案内▼

去る9月26日(土)、例会「2015年夏のロッシェニ祭報告」(講師:朝岡 聡)を実施し、31名のご来場をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。この日はロイヤル・オペラ《ギヨーム・テル》、スカラ座《オテッロ》、ROF の上演を中心に、朝岡さんの軽妙な語り口に映像と録音も交え、その特色が紹介されました。ロッシェニ作品と ROF に絶えざる発見の喜びがあることも確認でき、例会の出席者から2名様の新規入会をいただきました。ロッシェニの楽しみを共有する仲間が増え、嬉しいかぎりです。

次回例会は11月3日(火・祝)、美食家ロッシェニをテーマに次のように実施します。講師は『ロッシェニと料理』の著者なのに、このテーマで公に話をするのはこれが初めて。その意味でも貴重な機会になるでしょう。

なお、次回例会から休憩中のお茶サービスが廃止されます。従来どおり例会半ばに15分ほど休憩を設けますが、飲み物につきましてはご持参いただくか、会場1階の自販機でお求めください。

題目: 美食家ロッシェニの真実

(二つのドキュメンタリー「料理人ロッシェニ」「厨房に入った作曲家」と最新文献にみる美食家ロッシェニの真実)

講師: 水谷彰良

日時: 2015年11月3日(火・祝) 午後1時30分開始、午後4時半頃終了予定

会場: 北沢タウンホール 3F ミーティングルーム (下北沢駅より徒歩4分)

地図は <http://kitazawatownhall.jp/map.html>

会員とそのご家族は無料。その他の方は当日1,000円を頂戴します。

内容:

今年5月にイタリアで研究書『ロッシェニ: 洗練された美食家』(G. Giovanetti: *Rossini, raffinato gourmet*) が出版されたことでも判るように、食通ロッシェニに対する関心は絶えることがありません。けれども今なお誤った情報が蔓延し、この問題に関する事実や真実を知る人は僅かです。この例会では二つの重要なドキュメンタリー——1991年にドイツで制作された「料理人ロッシェニ」(80分。ペーザロと ROF 上演映像を含み、バヴァロッティやムーティも登場)と、筆者の制作協力で海外取材したTV番組「厨房に入った作曲家」(ダイジェスト版、32分。2002年)——を視聴するとともに、最新研究で明らかになった美食家ロッシェニの真実をお話します。 [講師・記]

### ▼新譜: オルガ・ペレチャツコ/ロッシェニ! ▼

◎Olga Peretyatko: Rossini! (オルガ・ペレチャツコ/ロッシェニ!)

《《ランスへの旅》～フォルヴィル伯爵夫人のアリアとコリンナの即興歌、《マティルデ・ディ・シャブラン》～マティルデの Rondò・フィナーレ、《タンクレーディ》第2幕～アメナイーデのカヴァティーナ、《セミラーミデ》～「麗しい光が」、《セビーリヤの理髪師》～「今の歌声」、《イタリアのトルコ人》～フィオリッラのアリア。全7曲)

オルガ・ペレチャツコ (S)、アルベルト・ゼッダ指揮ポーロニヤ市立歌劇場管弦楽団 & 合唱団 録音: 2014年11月ポーロニヤ Sony 88875057412 (CD1枚)



7月末に発売されましたが、CD1枚なのにアマゾンの予価が高く、ヨーロッパでも20ユーロとあって買い控えて紹介が遅れました。ちなみに現在のアマゾン価格は予価の半額1,791円。ヨーロッパよりも遥かに安くなりました。スカラ座《オテッロ》と ROF コンサートの印象がいま一つだったため、食指が動かなかったのも事実です。

聴いた感想ですが、とても表情豊かで丁寧な歌唱が印象的です。近年ジルダとヴィオレッタのヴェルディ歌手にシフトし、ロッシェニは7月スカラ座のデズデーモナくらい。発声面でロッシェニと違ってきているのは事実でも、これだけ歌えれば立派…指揮がゼッダ先生ですから伴奏も含めて音楽的な解釈も万全…と言いたいところですが、ペレチャツコの勿体ぶってこれ見よがしな歌の風情に好き嫌いが分かれるでしょう。

優れたメゾソプラノのロッシェニ歌唱に慣れた筆者には、キンキンしたソプラノの高音域のコラトゥーラが耳障り…とくにマティルデの Rondò・フィナーレと「今の歌声」のヴァリアツィオーネがそう。でもペーザロで大人気だったペレチャツコの新録音。人気と実力のギャップを理解するためにも、お聴きください(変な勧め方ですが…)

### ▼ロッシェニ文献の新刊2点▼ (『ロッシェニ: 洗練された美食家』『ジョアキーノ・ロッシェニの老いの過ち』)

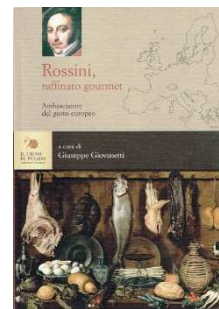
前号に紹介したロッシェニ財団の文献とは別に、2点の新刊があります。どちらもオペラではなく、ロッシェニの美食や晩年の「老いの過ち」がテーマですが、研究者の関心がロッシェニの人間性や後半生の実態解明に向き始めたことが判ります。

©a cura di Giuseppe Giovanetti, *Rossini, raffinato gourmet.*, Il cigno di Pesaro edizione d'autore, 2015.

ジュゼッペ・ジョヴァネッティ編『ロッシーニ：洗練された美食家』（「ペーザロの白鳥」著者出版、2015年。188頁。価格記載なし）

食通ロッシーニに関する言説は出典の怪しい逸話ばかりで、実証的な研究がされてきませんでした。1993年刊の拙著『ロッシーニと料理』はその欠を埋めるべくロッシーニ書簡を重視し、逸話の出元を調べて書きましたが、20年以上も前の執筆ゆえ未出版の書簡は僅かしか使えませんでした。これに対し、今回出版された『ロッシーニ：洗練された美食家』は3年がかりで約3000のドキュメントを調べて執筆され、未出版の書簡からの引用も多く、周辺資料も掘り起こされています。

基本的にイタリア側の資料が中心で、フランス側の情報が充分でないように感じますが、ロッシーニの書簡とドキュメントに基づく実証的研究とあれば仕方ありません。自家出版らしく、奥付に出版社「ペーザロの白鳥」の住所記載がなく、著者ジョヴァネッティのメールアドレスがあるだけ。価格の記載もなく、幾らだったか記憶がありませんが、25ユーロ前後だったと思います。カラー図版も用いたちゃんとした書籍なのに、イタリアのアマゾンや新本サイト [ibis.it](http://ibis.it) にも出てきませんが、ともあれ食通ロッシーニに関する重要文献としてお勧めです。



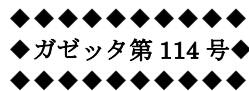
◎a cura di Massimo Fargnoli, *I Peches de Vieillesse di Gioachino Rossini*, Guida Editori srl, Napoli, 2015.  
(testi di Massimo Fargnoli, Giovanna Ferrara, Alessandro Marangoni, Gianfranco Mariotti, Sergio Ragni, Piero Rattalino, Alberto Zedda, iconografia a cura di Luigi Cuoco)  
マッシモ・ファルニョーリ編『ジョアキーノ・ロッシーニの老いの過ち』（ガイド・エディトリー、ナポリ、2015年。270頁。30ユーロ）

今年7月に出版された前記7人による共著で、ゼッダ先生やロッシーニ蒐集家セルジョ・ラーニ、ピアニストのマランゴーニも執筆者に名を連ねています。ロッシーニの晩年と作品集「老いの過ち」に関する多角的な研究書である本書には、珍しい図版も数多く掲載されています。初めて見るロッシーニの写真や肖像画もあってビックリ。表紙のロッシーニの写真、見たことある人いますか？ ロッシーニと「老いの過ち」に関心のある方は必携。イタリアとフランスのアマゾンから取り寄せ可能です。



本日はこれにて失礼いたします。

(2015年10月5日 水谷彰良)



ガゼッタ第114号をお届けします。

本号は、「11月7日、松井田秋のコンサート《セビリヤの理髪師》ピアノ伴奏上演!」、「12月12・13日、京都芸術劇場 春秋座《セヴィリアの理髪師》上演!」、「萬屋様のお通りだ…日本における《セビーリヤの理髪師》受容の諸相(1)」、「2016年ROFの日程発表!」をお届けします。

次回例会11月3日(火・祝。講師:水谷彰良)の告知はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

### ▼11月7日、松井田秋のコンサート《セビリヤの理髪師》ピアノ伴奏上演!▼

◎松井田秋のコンサート《セビリヤの理髪師》(ピアノ伴奏。イタリア語上演、字幕付き)

期日:2015年11月7日(土)15時開演

会場:松井田文化会館大ホール(群馬県安中市)

出演:アルマヴィーヴァ伯爵:上原正敏、ロジーナ:富岡明子、フィガロ:牧野正人、バルトロ:田中大揮、バジーリオ:小野寺光、ベルタ:荒川恵美、解説・ピアノ:金井紀子

指定席:3,500円、自由席:2,500円

お問い合わせは、松井田町音楽文化愛好会(電話:027-393-0073 小坂橋)

毎年秋に群馬県安中市の松井田文化会館で行っている金井紀子プロデュースのオペラ上演(ピアノ伴奏によるダイジェスト)。今年はロッシーニの《セビーリヤの理髪師》を取り上げます。3人の主役に定評のある上原正敏、富岡明子、牧野正人を揃え、金井紀子さんのピアノ伴奏と解説付きでお楽しみいただけます。

以下、金井紀子さんのメッセージです——「松井田文化会館から近い群馬の名山・妙義山は紅葉が最盛期を迎えています。ロッシーニを聞いた翌日は紅葉狩り、というのはいかがでしょう」。







ガゼッタ第 115 号をお届けします。

本号は、「2016 年 ROF 最終日 (8 月 20 日) はフローレス 20 周年!」、「直近の注目公演: ゲントの《アルミーダ》& エキストラ募集!」、「日本楽劇協会/金曜会『セキ`ラの理髪師』…日本における《セビーリヤの理髪師》受容の諸相 (2)」をお届けします。

次回例会 11 月 3 日 (火・祝。講師: 水谷彰良) の告知はこちら → <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

#### ▼2016 年 ROF 最終日 (8 月 20 日) はフローレス 20 周年! ▼

先日レオ・ヌッチのリサイタルに行きましたら会員の眞下ご夫妻から、「来年 ROF の最終日にフローレスのリサイタルがあるみたいですね。ROF のサイトに出ていましたよ」と言われてビックリ! さっそく確かめると 10 月 19 日アップの情報に、「8 月 20 日午後 8 時半、フローレス 20、クリストファー・フランクリン指揮ボローニャ歌劇場管弦楽団」とありました!

タイトルの「FLOREZ 20」は、「ファン・ディエゴ・フローレスの ROF デビュー20 周年記念」という意味でしょう。だって彼は 1996 年に 23 歳で《マティルデ・ディ・シャブラン》に出演し、ROF デビューを飾ったのです。であれば個人リサイタルではなく、フローレスを含めて ROF 仲間が盛大にガラコンサートを開催してこれを祝うのでは?…というのが現時点での筆者の予想です。

これで来年夏のスケジュールは決まり!…ROF は 2 巡目から 3 回ずつ観劇し、「FLOREZ 20」の翌日に帰国の途に就くかザルツブルクに移動…なんてことを考えています。ちなみに来年も郵船ツアーを実施予定ですが、「FLOREZ 20」は外せませんね。

10 月 19 日アップの ROF 情報ははこちら → <http://www.rossinioperafestival.it/?lang=eng&IDC=506&ID=686>

#### ▼直近の注目公演: ゲントの《アルミーダ》& エキストラ募集! ▼

11 月 19 日初日の注目公演、それがベルギーのゲントのフランダース・オペラ (Opera Vlaanderen) におけるロッシェニ《アルミーダ》です。

◎Rossini: Armida 2015 年 11 月 19、22、25、27、29 日、12 月 1&4 日 Opera Vlaanderen (Gent)

演出: マリアム・クレマン、指揮: アルベルト・ゼッダ/園田隆一郎

アルミーダ: Carmen Romeu、リナルド: Randall Bills、ジェルナンド/ウバルド: Robert McPherson、ゴッフレード/カルロ: Yijie Shi ほか

指揮がゼッダ先生と園田さん、アルミーダは昨年 ROF で同役を演じたカルメン・ロメウ、脇役でシー君も出ます。知人が観に行きますので、感想の寄稿をお願いしておきました。

この上演のことを調べていたら、ツイッターに Dido Regina さんが《アルミーダ》のエキストラ募集を次のように記していました——「フランダース・オペラが、ロッシェニ『アルミーダ』出演エキストラを募集。若くハンサムで筋肉質の男性 (20~35 歳)、茶髪の優しいお母さんタイプ (27~35 歳)、活発な少年 (9 歳)、メタボ体型の男性 (35~45 歳) でヴァイオリン弾ける人」。

筆者はメタボ体型の男なのに 58 歳でヴァイオリンが弾けません…残念! でも、なんでヴァイオリンを弾けるメタボ男性のエキストラが必要なのでしょう…こればかりは舞台を観ないと判りませんね。

Dido Regina さんのツイッターはこちら (10 月 9 日をご覧ください) → <https://twitter.com/didoregina>

フランダース・オペラのサイトはこちら → <https://operaballet.be/nl/het-huis/zoekt/figuranten#tab>

ちなみに園田隆一郎さんがすでにゲント入りし、現地からツイッターに意気込みを記していますので、併せてご覧ください。こちら → <https://twitter.com/RyuichiroSonoda>

#### ▼日本楽劇協会/金曜会『セキ`ラの理髪師』…日本における《セビーリヤの理髪師》受容の諸相 (2) ▼

拙稿「日本におけるロッシェニ作品の受容」の増補改訂版を今年 5 月に協会ホームページに掲載しましたが、その後二つの戦前上演資料を入手しました。その一つが今回取り上げる昭和 9 年 (1934 年) 6 月 1~10 日に日本楽劇協会/金曜会が築地小劇場で上演した作品のプログラムです。拙稿では増井敬二著『日本オペラ史 ~1952』(水曜社、2003 年) 306 頁の記載に準拠し、オペラ《セヴィルの理髪師》として採用しましたが、入手したプログラムからオペラではなくボーマルシェの劇と判りました。

前記『日本オペラ史 ~1952』は典拠として当時の「東京朝日新聞」「日本楽劇協会パンフレット」「音楽新聞の評」を挙げていますが、パンフレットは表紙や書誌情報ではないかと思えます。そして山田耕筰の総監督で管弦楽団も参加した上演とあってロッシェニ作品と理解し、「(セヴィルの理髪師) (劇と音楽、(セビーリアの理髪師))」としたのでしょうか。でも入手したプログラムの表紙には「セキ`ラの理髪師」、裏面に「セキ`ルの理髪師」「ボーマルシェ作、井上勇譯」と印刷されています。

当時の新聞、雑誌、パンフレット (プログラム) を基に上演記録を編纂するのは文献・書誌学的に正解ですが、当時の記事や批評は上演時の題名とは異なる題名で書かれることが多く、パンフレットから転記しないと上演時



の題名が判りません。この場合もパンフレット表紙の複製や書誌情報ではなく、現物を確認して典拠とする必要があります。そして前記のように表紙と裏面解説で題名表記が異なる場合は、これを注記してそれぞれの記載を明示する必要があります。

その意味で従来文献の書誌情報は不適切で、誤謬や不適切な表記を広めることにも繋がります。残念なのは、明治・大正・昭和 20 年までの公演パンフ／プログラムが国会図書館、音楽資料館、音楽大学を含む全国の図書館横断検索に出てこず、どんなに探しても所蔵を確認できないアイテムが多々あること。存在しないのではなく個人所蔵のレベルで止まり、系統的蒐集の対象から漏れてしまったのでしょう。それもあって筆者は常に資料を探索し続け、現物を入手するわけです。

でも、ロシーニに限定しても購入費用は馬鹿になりません。これについても協力者が現れないと、蒐集の拡大や保存の双方に課題を残しそうです。当面は、協会ホームページ掲載の文章を随時増補改訂して対処したいと思います。

本日はこれにて失礼いたします。なお、拙著『新 イタリア・オペラ史』の書評が 2 誌に掲載されました。『音楽の友』11 月号では小畑恒夫氏が、「(旧著で) 水谷氏はオペラの誕生から現代までのイタリア・オペラの変遷を鮮やかに描くことによって、個々のオペラの正しい評価を可能にした」「この方向は旧版以上にはっきり打ち出されて記述も増え、歴史の全貌がより見えやすくなった」、『モーストリー・クラシック』12 月号では國土潤一氏が、「情報量の半端ない多さは、更に研究をしたい人々の足掛かりとなるにちがいないし、その限られた紙面の中に、受け売りではない著者の確かな視点と主張が溢れている。労作に感謝の拍手を贈りたい」と記しています…ともあれ、苦勞した甲斐があったようです…

(2015 年 10 月 25 日 水谷彰良)